

2006年度 森村・川村ゼミ議事録

4月19日分

記入者：鯨井留実

司会者：元島瑞樹

本日のゼミ内容：

1. 合宿について
2. 前期グループ研究・個人研究日程の決定
3. 森村先生による<モダニズムからポストモダニズム>にいたるまでのレクチャー
4. 12日に引き継いでの議論

決定事項

●合宿について

合宿期間：5月3日～4日

場所：三浦海岸

担当：池戸・小原・田中

●グループ研究発表日程

文献：『ポストモダニティーの条件』

文献：未定

5月10日：元島・池戸・佐藤

5月31日：元島・田中・小林

17日：鯨井・小林・小川

6月7日：鯨井・桑原・小原・佐藤

24日：豊島・田中・小原・桑原

14日：豊島・小川・池戸

●個人研究発表日程

6月21日：小林・桑原

28日：小原・小川

7月5日：池戸・田中

12日：佐藤・鯨井

19日：豊島・元島

議論の展開

フルクサス・前衛芸術がもたらしたもの

●フルクサスはアートなのか？

フルクサスのメンバーが行った活動とは

⇒「アートをもう一度考え直したい」という活動

[ブルジョワ階級+非ブルジョワ階級]すべてがアートであるという考えを提起したところにフルクサスの意義はあったのではないだろうか・・・

●お金持ちはなぜ高尚なアートに行くのだろうか？

- ・一つのステイタス、または名誉のため
- ・人類のため

(自分たちの私欲のためではなく、文明の宝を人類のために残そうという、高い基準の水準で考えた上での)

●フルクサスの観客はどんな階級の人だったのか？

残っている写真を見る限りだと、若そうではあるが…

→映像が来たらみんなで「観客」の層を観察しましょう

●フルクサスの活動の意味は？

フルクサスの活動に用いられた作品や、方法はあくまで日常的であった。

つまり、そこまでハイアートを壊そうとはしていなかったと考えられるだろう。

「アートを日常に…」という考えが主だった。

記入者の考察

芸術活動の『フルクサス』一つを取り上げても、やはりアートの奥深さはもちろん、多くの疑問を感じる。また最近は何故こんなにも自分がアートに対しての「答え」といった不透明なものにこだわりを持っているのかということにも疑問を感じる。

『芸術とは何か』私たちのゼミでも度々打ち出される疑問は、アートに携わる人々にとって、「永遠の疑問」として、私達に常に新しいものを見つけ出させるテーマやメッセージとなっているように感じる。

今年度の私達のゼミは始まったばかりである。どんなものもアートの中に取り入れてしまふ芸術とは、受け手によってどのようにも解釈が可能な分野である。そんな『芸術』を柱にして、メンバーも新たに加わり、私達がこれからの一年間を通してどんな色を作っていくのか、議論を通してどのように『芸術』を解釈していくのか、今から本当に楽しみである。

鯨井留実